

サクたま練習帳



ADULT ONLY

私は白瀬咲耶、女子高に通う普通の女子学生…とりたいが
どうやら自分は同性に好かれやすいらしい
「王子様」なんて呼ばれることもあるかな
背が高く、運動が出来るから…なのかもしれないが…
それでも人をときめかせる事ができるのは嬉しい

だからかな…
「アイドルにならないか」と
声をかけられた時
すぐに了承してしまった…
私の様な可愛くない女が
アイドルなんて…と思ったが…
プロデューサーは
私を女の子として扱ってくれたのは
正直嬉しかったかね

だがグループアイドルのせい
忙しくなると全員を
フォローするのは
難しくなったようで…
臨時のプロデューサーを私は
あてがわれた…
多分親と同じぐらいの歳
威圧感があり…

「俺は山城豪蔵
よろしくな！
デカパイねーちゃん」
……正直苦手なタイプだ
……何より……
その目が……

「おう、似合ってるぞー。
やっぱお前エロ可愛いな、咲耶
もっとそのデカパイ見せろって」



「やめっ…あんっ♡」
「いい声出せるじゃねえか
お？なんで濡れてるんだ？
さくやあ♡♡」
心のどこかで…こんな風に…強い雄に
屈服したい…自分が牝だと自覚したい
そんなキモチがあったのかも
しれない…この不躰な男は…

私を牝として見てくれる

不躰な物言いに名前を呼び捨て

「でか…いや…山城さん

こんな可愛らしい格好は

私のイメージじゃないぞ…

それこそ恋鐘とか……」

「自覚が足りないよ、お前。

顔も体も男好み…そんな赤い顔してりゃ

焦らしてりゃどんなオッサンも飛びつくぞ

この写真でプレゼンしてきてやるから

もっと足開け」

理不尽な命令口調…こんなセクハラまがいの

言動…社長に言えばすぐに問題になるだろうに

私は言わなかった…今まで親ですら私にこんな

横柄な態度を取る人間はいなかったからだ

「山城さんの強い口調の命令を断れない私はエスカレートする要求を全て飲み……」

気づいたときには彼の性処理アイドルになってしまった「んほっ♡んべっ♡さっ♡♡」

んじゅん

「おうっ…人参のしゃぶり方上手くなったじゃねえか
咲耶あ□へへ…
「ん…フッフ♡」
酷いことをさせられている…
はずなんだが
何故かな…
褒められると
悪くない気分なんだ

「おおっ♡イグっ♡オマン♡お♡すべっ♡
自分を牝であると強く感じさせてくれる
この雄を…私は……」

「どうだ咲耶？
前の話考えてくれたか？」
「はあはあ…セックスしながら…
言うのは卑怯じゃない…か？
山城さん」
「へへっ…まだ余裕あるな
じゃあOKって言うまで
マンコ渴かせないから覚悟しろ
俺のドスケベお姫様よお」
「フフ…望むところだよ…
ヘンタイ王子様♡」

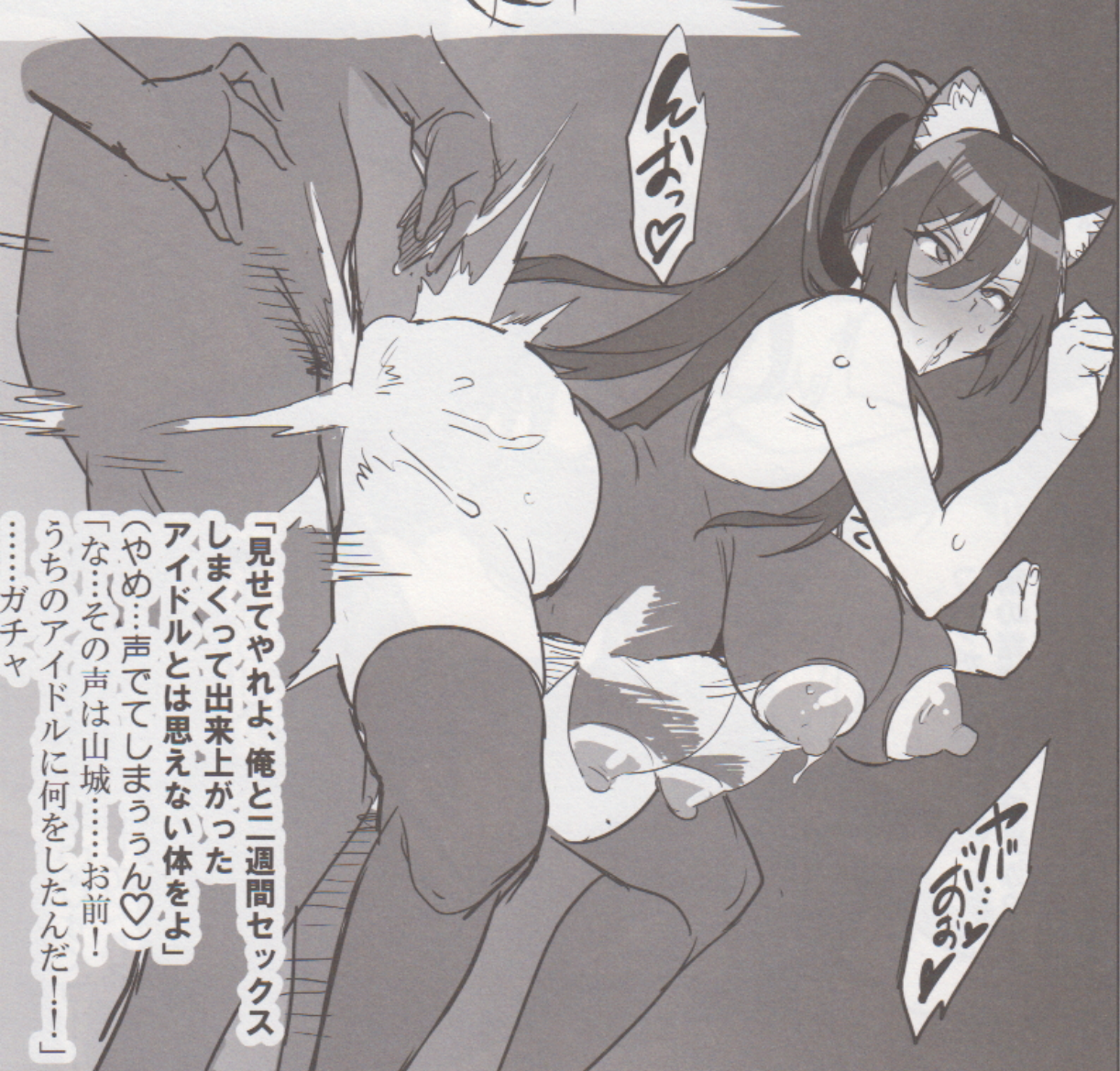
「咲耶と連絡が取れなくなって半月……
山城さんも同じ時期に消えた……
書かれていた住所が違っていた
山城さんの住んでいるアパートを
ようやく突き止めたが……」

山城さん？いますか？
ガチャ……
「え……プロデューサー……？
どうして……」がっ！

「さ、咲耶！
どうして……皆心配して」
ガチャ



「あ……あけてくれ！」
「だ……ダメ……なんだ……それは……んっ！
私は大丈夫……んふうふう……んふう
皆には悪いが……私は事務所を
辞めると……伝えて欲しい……んおおっ□□」
「な……何をしてるんだ？咲耶……」



「見せてやれよ、俺と二週間セックス
しまくって出来上がった
アイドルとは思えない体をよ」
(やめ……声でてしまおうん♡)
「な……その声は山城……お前！
うちのアイドルに何をしたんだ！！」
……ガチャ

「咲耶……！」

「み…見ないでくれ…」

「プロデューサー…」

「こんなみつともない」

「格好をした私を…んっ♡」

「おい！こっちは」

「レッスン中だぞ？」

「れ…レッスンだと…」

「咲耶にこんな事して」

「タダで済むと…」

「おっと勘違いしないでくれよこれは合意の上だ」

「今度俺が独立して出すAVレールベルの第一弾として」

「元アイドルのサクヤのAVデビューが決まったんだよ」

「なっ…本当なのか？咲耶」

「あ…ああ…気づいてしまったんだプロデューサー…」

「本当の私は男の人に悦んでもらうことが最も幸せを」

「感じる…ドスケベな牝だったんだと…それを」

「教えてくれた山城さん…いや…プロデューサーと一緒に」

「AV界の一番を目指すんだと…」

「相談せず決めて」

「本当にすまない…」

「最低だ…私は…んっ♡」

「本当にすまない…んっ♡」

「今はダメエ…♡謝ってるの」

「コイツは卒業と同時に」

「デビューが決まってるんでな」

「それまでは毎日レッスンだ…」

「見た奴ら全員の精子を搾り取る」

「AVアイドルにしなきゃ」

「いけないんでな」

「部外者は早く出ていきな！」

「ん…！めん…なさい…」

「そして…」

「サヨナラ」

—あれから半年……
彼女抜きでも
彼女のユニットだった
アンティイカは
人気を博した……だが
ボクは残念で
仕方がない……
彼女がいればきつと
もつと……

だがそれは考えるだけ
無駄なことだ
彼女は彼女の土俵で
活躍している
そして何より彼女は……



とても
幸せそうだ

国民的

カクシ

ド
ス
タ
バ
ア

サク
ヤ
の
フ
ア
ー
ア
ー
ア